

稲賀 繁美 氏 国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授、放送大学客員教授

「いまなぜ海賊史観かーグローバル時代の日本研究を考える:

商品流通と藝術概念を手がかりに」

海賊は欧州では古来から「万人の敵」と呼ばれてきた。だが今日、商取引から金融さらにはサイバー空間での情報の授受に至るまで「海賊行為」が既存の秩序の裏を搔いて蔓延している。その一方でこれまでの法律体系は、ナノ・バイオ・サピオに広がる新たな技術革新による数々の新機軸をもはや制御できない状況を迎えている。国民国家体制の理念を裏切るこうした現実を前にすると、ここ600年にわたる世界史の帰趨を顧み、その成り立ちを解剖することが不可欠となる。今、東アジアにおいて日本を考察することも、この課題と決して無縁ではない。本講演では「海賊史観」を提唱する所以を具体的な事例から説き明かしたい。

■ 経歴

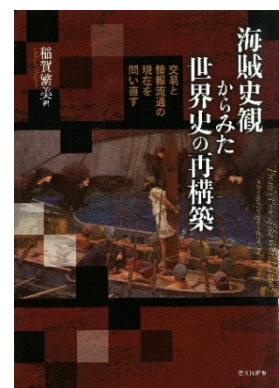


1957年東京生まれ、広島育ち

1979年東京大学教養学部卒業、1988年同大学院・比較文学比較文化専攻単位取得退学及びパリ第7大学博士課程修了(新課程統一博士号取得)、三重大学助教授を経て1997年より助教授として国際日本文化研究センター勤務・総合研究大学院大学担当。2004年より教授。2013-15年大学院文化科学研究科研究科長 2016-18年国際日本文化研究センター副所長。

主な著書に『絵画の黄昏』(1997)『絵画の東方』(2001)『絵画の臨界』(2013)『接触造形論』(2016:すべて名古屋大学出版会)。編著に『伝統工藝再考』(2007:思文閣出版)『東洋意識』(2012:ミネルヴァ書房)『海賊史観から

みた世界史の再構築』(2017:思文閣出版)。共編著に *Vocabulaire de la spatialité japonaise* (2014,CNRS éditions)ほか。サントリー学芸賞、渋沢クロード賞特別賞、倫雅美術奨励賞、和辻哲郎文化賞、フランス建築アカデミー出版賞などを受賞。2018年度より放送大学講座「日本美術史の近代とその外部」を担当。



『海賊史観からみた世界史の再構築—交易と情報流通の現在を問い直す—』

稲賀繁美 編

初版年月：2017年3月